

平成27年11月1日(日)

老球の細道176

文武両道、逞しいソクラテスになれ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

かつて、東京大学の大河内一男総長は、昭和39年の卒業式で哲学者J・S・ミル(英)の言葉「満足したブタより、不満足な人間になる方がよい。満足した愚か者よりも、不満足なソクラテスになる方がよい」をもじって「太ったブタより、痩せたソクラテスになれ」と述べた。「身体よりも知に長けよ」という言葉で卒業式で激励したのだが、実は古代ギリシャの哲学者ソクラテスは筋骨隆々のキン肉マンだったというオチがついた。哲人のみならず鉄人だったのである。

『知的スポーツのすすめ』(東京大学出版会)という本がある。日本の大学の「知」の頂点である東京大学教授が「文武両道」の意義について書いていたので紹介したい。

【古代ギリシャでは、現代科学の礎となる自然科学や数学、論理学などの学問の体系化が行われただけでなく、スポーツの競技会である古代オリンピック祭も開催されたように、学問とスポーツをともに極めることが、若者にとっての目標とされていました。

哲学者プラトンは、大著『国家』の中で、「教育に必要な科目は体育と音楽」と述べて、身体と感性の教育を重んじました。同じく哲学者アリストテレスは、文武両道の大切さを当時の支配者であったアレクサンドロス大王に進言したといわれています。

本人も「形而上学」などに代表される哲学、自然科学、政治学などの著作を残しただけでなく、スポーツを愛好していました。アリストテレスやプラトン、そしてソクラテスは哲学者として有名ですが(古代ギリシャ3大哲人)、彼らが筋骨隆々だったことはあまり知られていません。当時、自分の意見を他人に説くには、ひ弱な身体では説得力がなく、器自体もたくましくなければならなかったのでしょうか。こうした偉大な先人の考え、つまり文武両道の精神を、身体の感性が鈍くなり、体力が劣ってきている21世紀の今こそ生かしたいものです】

最近の脳科学において、運動がある種の知的能力を高めるという科学的知見が多数発表されている。例えば、運動がうまくなるのが早いネズミの脳は、そうでないネズミよりも「海馬」の細胞が分裂増殖して長期記憶が増強されている。また、前回のオリンピックが開催されたロンドンのタクシー運転手の海馬の大きさは、一般人よりも大きかった等…。

脳海馬という箇所は物事を新しく覚えるのに必要不可欠な部位である。運動が海馬の機能を向上させるので、運動は記憶力や学習能力を高めることに好影響を与える。ちなみに、認知症はこの海馬がダメージを受けた状態である。昔のことは覚えているが、今日のことはずぐに忘れてしまう。今の私と同じである。しかし、最近の脳科学の知見によると、海馬は何歳になっても鍛えていけば発達可能だということなのでかすかな光が見える。

古代ギリシャのみならず、かつて会津の地においても、日新館で文武両道の教育が行われ、数年前NHK大河ドラマで放映された「山本八重」や、その兄「山本覚馬」など文武両道に秀でた人材を数多く輩出した。なのに現在は、社会的な偏見か風評被害か、勉強ができる人はスポーツをあきらめ、または過小評価し、スポーツのできる人は勉強をあきらめ、または過小評価しているように感じるのは私がボケてきているせいなのか。